

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4390101956		
法人名	社会福祉法人 伸生紀		
事業所名	グループホーム画図こもれび		
所在地	熊本市東区画図町所島305-6		
自己評価作成日	令和4年2月1日	評価結果市町村受理日	令和4年5月12日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/43/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人ワークショップ「いふ」
所在地	熊本県熊本市中央区水前寺3丁目15-1
訪問調査日	令和4年3月1日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

<ul style="list-style-type: none"> ・食事や水分摂取の状態や変化に速やかに対応し、必要に応じて医療と連携し、安定した体調を保っている。 ・行事を多く計画し、日々の生活を楽しくいただけるよう柔軟に計画している。 ・おやつを手作りしている。 ・ご家族に積極的に声をかけて、行事や会議への参加を促すだけでなく、家族と一緒に外出する機会を持つなどして、ご家族とご利用者の関係性が途切れないように、双方に支援を行っている。 ・日頃から清掃に力を入れ、清潔な環境保持に努めている。 ・法人全体で、4つのゼロ(おむつゼロ、誤嚥性肺炎ゼロ、脱水ゼロ、身体拘束ゼロ)を掲げ、ご利用者の当たり前の生活を支えるための指標として、職員一丸で取り組んでいる。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

<p>管理者は入職時の研修や日々のケアの中で、ホーム名と理念にある「こもれび」の言葉に込められた、木漏れ日のように利用者にきらきらと輝いてほしいという創設者の思い、こだわりを具体的に伝えて、理念の意識の浸透を図っている。職員の気になる言葉使いについて、正しい言葉使いを示した一覧表を作成し、傾聴する姿勢・声の大きさ・表情等に配慮する事も書き添えて、職員の目につきやすい場所に掲示している。利用者に接する職員の表情や言葉使いから、利用者尊重の姿勢が伝わった。誕生日は利用者のリクエストメニューと本人の好みを取り入れた個性的な誕生ケーキでお祝いしている。イベント食を月に1~2回提供し、バイキング食や餃子の食べ放題等、職員の創意工夫による豊かな食の支援がある。管理者は法人の方針に沿って職員の提案を精査し、必要な場合は軌道修正を促し、職員への声掛け及び気配りと両輪となって、職員の向上心を高めている。</p>
--

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者や職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	新人研修や中途採用の職員にも、研修で理念についてしっかり学習の機会を設けている。 毎朝、朝礼時に基本理念の唱和と目的を確認し、意識づけを行っている。	管理者は新人研修や日々のケアの中で、ホームの名前や理念にある「こもれび」の言葉に込められた、木漏れ日ように利用者にときらきらと輝いてほしいという創設者の思いを分かり易く具体的に伝えている。カンファレンスの時、法人の方針に沿っているか振り返っている。職員は理念をケアの拠り所とし、ホームの年間目標を掲げて理念の着実な実践に繋げている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域の区役や祭りなどのイベントに参加することで地域住民との交流を図っていた。 地域交流室の活用を目指し、環境を整えることで地域に開かれた施設づくりを目指している。	開設時から地域との交流を大切にしており、地域の災害マップ作りなどに参加している。また、地域交流室を公民館代わりに使って下さいと地域に呼びかけている。地域行事の案内もあり、地域の清掃活動に参加していたが、「今はコロナの感染対策で大変な時期だから、参加しなくていいですよ」と温かい言葉をいただいた。季節の野菜が届けられるなど、日常の交流が続いている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域の健康クラブや行事に参加し、認知症の支援を行っていることや、地域交流室の活用について伝えてきた。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	新型コロナウイルス感染症拡大防止のため集合しての会議開催が困難で、書面での開催になっているが、行事報告や、ご利用者・職員の変動、事故の報告などを行い、意見交換で出た意見をサービスに活用している。	運営推進会議は全家族・地域代表・行政の参加を得て開催している。地域代表の委員が2名増えており、ホームへの理解が深まっていることが感じられた。コロナ禍の現在は書面での開催となっている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者とは日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	随時連絡を行い、協力関係を作っている。	地域包括のささえりあが中心となって行っている勉強会や災害模擬訓練に参加している。市の担当者への質問や相談は事前に自分で調べた結果「これで間違いはないでしょうか」と確認している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	事業所内の研修で学ぶ機会もあり、職員全体に何がいけないのか伝えている。法人として身体拘束はいかなる場合でも行わないこととしており、それに基づいて、開設時から身体拘束は行っていない。	年2回、法人の研修で身体・言葉・薬の拘束等について具体的に学んでいる。職員は月1回、自分の言動をチェックリストで振り返り、出来ていない点を一つ一つ課題に挙げ、検討し改善している。記録には担当者の「熟読してください」という赤ペンの記入があり、周知に努めていることが伺えた。繰り返し指導を行い拘束をしない意識を高め、拘束をしないケアに取り組んでいる。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	日頃から不適切な言葉遣いはその場で注意し、虐待防止への意識づけを行っている。法人全体で、毎月行動を振り返る機会があり、反省点を翌月に活かすよう努力している。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	管理者は研修に参加し現状を理解できている。職員の中には制度を知らない職員もいるので、今後研修に参加するなど、学ぶ機会を作りたい。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約は全て管理者で行っている。疑問点や家族の要望を尋ね、丁寧に説明を行っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進会議には全家族に案内を行い、多くのご家族からご意見や要望を伺い、運営に反映させている。	運営推進会議は全家族に案内しているが、現在はコロナ禍の為、書面で開催している。資料と一緒に利用者の活動や日常の暮らしぶりを伝える沢山の写真を添えて送り、家族の安心に繋がっている。A4の用紙の上段半分に利用者の近況を報告し、下段は家族の返信欄になっており、意見提案がしやすい工夫をしている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	部署ミーティングや申し送りなどで意見交換をし、できるだけ意見を反映できるよう努力している。	管理者は職員が話しかけやすいよう心掛けている。職員の表情などいつもと違うと感じた際は声をかけ、すぐに話を聞くよう心掛けており、職員の信頼が厚いことが伺えた。コロナ禍の為、又職員数が増えたこともあり、全員集まった会議は行っていない。アンケートをとったり意見提案を記述方式で聞き取り反映している。	直接、その場で意見交換する事は、職員の気づきを深める良い機会と思われる。コロナが収束した際は対面式のミーティングが開催されることを期待する。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	法人の人事考課制度に基づき、上司が各職員の評価を行う機会があり、それを基に評価に反映されている。 有給を消化できるよう残日数を確認し、積極的に取得してもらっている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	研修に合う職員を選定して積極的に参加してもらっていたが、現在は新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点で控えている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	管理者が中心になり、地域の交流を行っている。職員から他のグループホームを見てみたいと意見が出ているので、今後取り組んでいきたい。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	ご利用者の日常の様子や表情・会話から言葉にならない本人の思いや願いを知ろうと努力している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	契約時にご家族から要望やご意見を伺っている。日頃から些細なことでもご家族に連絡して関係づくりに努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	日々の申し送りから問題点を把握して、迅速に対応するように努めている。また、担当者会議や面会の際などに、日常の様子や問題点を報告して、ご意見を聞いて対応を行っている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	季節の行事を一緒に楽しんだり日常の家事を共に行い、人生の先輩として経緯を表すように努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	ご家族と積極的にお話して情報を得たり、「私の人生の歩み」というご利用者のこれまでの人生をご家族に記入して頂き、その方らしい生活を送って頂くように努力している。誕生日会や行事などで一緒に過ごす時間を持つように努力している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	近所の方や友達が面会に来られたり、買い物時に近所の方に遭遇することもあった。	思い出の地巡りは、帰りたい場所や思い出の地、好きな場所に家族の協力を得て行っている。家族の意向でお彼岸の季節にお参りをする人や、菊池神社・実家・動物園・猫カフェ等、家族や近隣の方の協力を得て出かけており、馴染みの人や場との関係継続に努めていた。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	食事をリビングで行い、レクリエーションや余暇時間で一緒に外出を行い、ご利用者同士が顔を合わせて会話できる環境を作っている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退居後も葬儀に参列したり、ご家族に連絡を行い、精神面のフォローを行ったり、居宅介護支援事業所と情報共有を行っている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	関わりの中で言動や表情からご利用者の意思を確認している。ケアを検討する時、常にご利用者主体で考えるように努めている。	日常の会話やしぐさ、動きから思いを把握し、利用者に寄り添う支援に努めている。管理者は職員中心の支援にならないように軌道修正を促し、利用者を中心に検討し支援している。入浴の時間は利用者と職員がゆっくり会話し、把握した思いや意向をケアプランに反映している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	ご利用者やご家族からこれまでの生活歴や嗜好を聞き、好まれていること、これまでの習慣を取り入れるよう努力している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	一人一人生活リズムに合うように、その方にあった対応をしている。一人一人の能力の把握を行い、ミーティングなどにご利用者について話す機会を作っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ご家族からの聞き取りを行った意向や、医療機関とも情報共有を行い現状を把握して、反映させた計画書を作成している。	アセスメント・モニタリングは、日常の観察や記録、職員の情報を基に計画作成担当者が行っている。各利用者の認知症の症状に違いがあり、その対応も違うために、計画には支援内容を具体的に記載し、統一したケアに繋げている。利用者の好きなこと、大切にしていることを支援するプラン作成を心掛けている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の申し送りや記録、ミーティングでの話し合いから、職員間での情報の共有に努めている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	当日に外出を計画したり、頂いた野菜で献立を考案したり、会話で出たおやつを提供するなど、柔軟に対応するように努めている。また、訪問サービスなどご利用者やご家族の希望に沿ったサービスを提供できるよう情報提供に努めている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	買物や外食、地区の行事等で地域に出向いており、少しずつ地域との交流が進んでいるが、まだ少ない現状である。今後はより積極的に地域に目を向けたいと考えている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	定期的に主治医の診察を行い体調管理を行っている。診療の様子はご家族に伝え、時間を合わせて出席されるように勧めるなど、納得を得られるように支援している。	かかりつけ医は利用者・家族の希望を尊重し、従来のかかりつけ医と訪問診療で対応している。継続したかかりつけ医の受診と専門医の受診は家族が同行することとしている。家族の同行が出来なくなった際は、訪問診療に切り替えることが可能であることを伝えている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	訪問看護ステーションと契約しており毎週1回定期訪問で、体調の変化に対して相談し助言を頂いている。必要時には、主治医へ連絡を行っており連携できている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には病院へ出向き本人やご家族と会うように努めている。病院の担当者とは会うだけでなく、こまめに電話で情報交換を行い、退院前カンファレンスに参加するなどして、できるだけ早期の退院を目指すよう努力している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですることができることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時に、重度化した場合に備えて、事前の意向を確認している。看取りを行う姿勢はご家族に伝えており、実施も行っている。	ホームは看取りを行う方針であり、入居時に利用者・家族へ説明している。看取りのマニュアルを資料に研修を行っている。家族に利用者の状態を詳細に報告し、その時の状態に沿ったケアを行っている。花や写真を飾り、家族に見守られながら、心やすらかな時間を過ごせるよう配慮している。職員は看取り後の振り返りを行い、次に生かしている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	経験のない職員から不安との声が上がったために、実技で学ぶ機会を持ったが、まだまだ不十分と感じているので、今後取り組んでいきたい。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	避難訓練を実施し、未経験の職員が対応できるように調整しているため、少しずつ対応方法が実技で習得できている。地域住民とも協力体制もこれから課題になっている。	火災を想定した訓練を年2回、水害を想定した訓練を年1回実施している。水害の際の避難先を法人の施設としており、法人の大型バスが迎えに来る避難、職員のマイカーに分散した避難など、災害状況によって、輸送方法を変えようとしている。職員の応援体制も確立し、利用者の安心安全の確保に努めている。	地域住民から「避難場所での見守りは出来ますよ」との提案があっており、見守りの役割を依頼しての訓練を行うのも良いと思われる。
IV. その					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	敬語で接し、一人一人ご利用者に合った尊重した言葉を使うようにしている。日頃から言葉かけについては一覧表を掲示して正しい言葉遣いに努めている。不適切な声掛けがあった場合には注意しあうように努めている。	職員の気になる言葉使いを書き出して、それについて管理者が正しい言葉使いを示した一覧表を作成し、職員の目につきやすい場所に掲示している。言葉使いと共に、立ち止まって入居者の方を向いて、耳元で小さい声で等、声の大きさやトーン、傾聴する姿勢、表情にも配慮するよう記載している。聞いていて心地よい言葉使いに努めている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日常生活の中で、一人一人の意思確認を行ってケアを行っている。飲み物などでも、自己決定できるよう支援している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	業務の流れはあるが、ケアについてはご利用者のその日の状態やペースに合わせて行うよう努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	散髪などでも染髪やカット、パーマなど一色単にならないように選ぶ環境作りを行っている。マニキュアや帽子、化粧品などでおしゃれを楽しんで頂けるよう努めている。服の種類もこれまで以上に本人に選定してもらうように努めていきたい。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	日常では管理栄養士が作成した献立表をベースにしているが、行事や誕生日会、その日食べたものや、頂いた食材の活用などを行い、柔軟に対応している。ご利用者と一緒に調理、おやつ作りを行い、食べる楽しみを持つよう心掛けている。	誕生日は利用者のリクエストメニューを提供している。誕生日ケーキも多様で、中には蜂楽饅頭をデコレーション風にしたものもあり、職員のアイデアで個性的なお祝いの膳が提供されている。毎月1～2回のイベント食があり、バイキング食、ケーキバイキング、餃子の食べ放題、お花見弁当、お祝いの時はメッセージカードを添える等、趣向を凝らしており、食事を楽しむ多様な支援がみられた。	職員が一人でも利用者と同じ食事を食べて、味付けや食材の大きさ、食べやすさなど確認し、意見・提案する事も必要と思われる。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事・水分摂取量を把握して、少ない場合には職員間で共有して、ゼリーなどを提供して摂取量が確保できるようにしている。主治医と連携し、嚥下状態の把握に努めてご利用者に合った食事形態を提供している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後に必ず口腔ケアを実施している。必要なご利用者に対しては職員が仕上げ磨き、確認を行い清掃を保っている。歯科訪問診療に毎週1回来て頂き、定期的に専門家による口腔ケアを行い、日常のケアについて相談・助言を頂く機会を作っている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェック表にて一人一人の排泄パターンの把握を行ってトイレでの排泄を支援している。また使用しているパットが本人の状態に合っているか常に検討を行い、おむつゼロの方針の基、布パンツを使用するなど、不快に感じないように取り組み、排泄の自立に向けて取り組んでいる。	法人全体で「4つのゼロ」の取組があり、その中に「オムツゼロ」の取組がある。入居時に利用者・家族にその取組を説明し、布パンツの使用を伝えている。利用者の排泄パターンの把握や動作からサインをキャッチし対応している。褥瘡のあった利用者の排せつ用品を検討し、布パンツに変更したことで改善した例がある。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	毎日夜勤者が排便の有無を最終確認して、必要時には申し送り、必要分の下剤の与薬を行っている。毎日のヨーグルト摂取やマッサージの他、食物繊維などの摂取で下剤を減らすよう取り組んでいる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入浴に気分が乗らない時には無理をせず、夜間や別日に声をかけたり、ご利用者の意向を確認している。個浴で、希望に合った温度設定と、毎回の湯の入れ替えを行ったり、入浴中に水分を提供するなど、気持ちよく入浴できるよう心掛けている。	個々の利用者のこだわりや習慣を大切に、気分よく入浴できる支援に努めている。入浴機器を利用して全員が浴槽に入ることが出来、くつろいだ時間となっている。職員とのおしゃべりも楽しみであり、利用者の本音が漏れ聞こえてくる時間でもある。その情報を共有しケアプランに反映している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	ご利用者の希望や状態に応じて日中に臥床される方もいる。夜間の不眠に対しては無理に寝て頂こうとせず、離床して話を傾聴したり、ホットミルクを提供するなどして落ち着いて頂けるように工夫している。できる限り過剰に眠剤を使用しないよう主治医と連携して減量している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬が変更した時には、注意点まで合わせて申し送るようにして、状態の変化の観察を行っている。薬の作用が十分に理解できていない職員もいるため伝達が必要である。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	調理や洗濯などの家事の中で、行ってきた習慣を維持できるように支援している。毎日のレクリエーションの他、季節行事や外出などを積極的に計画し、楽しんで頂けるように努力している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している	家に帰りたいなどの希望をかなえることが難しい場面があるが、買い物や散歩で外に出る機会を作るようにしている。ご利用者の思い出の地を巡る機会を作り、個別のニーズに合わせた外出支援を行ってきたので、今後も継続したい。	個別や2～3名の利用者に声をかけ、近隣の散歩に出かけている。雪が積もった日は、ベランダに出て雪見をしたこともある。利用者の思い出の地、懐かしい場所、好きなところ、行ってみたい場所、会いたい人等々、希望を聞いて個別に対応する「思い出の地を巡る」取組がある。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	現状では自分で管理されている方はいない。日常の買い物などで、財布を渡して支払いを支援するなど、使う機会を持つことはできると考えているが、現状では気が付いた時に行っている程度なので積極的に取り組んでいきたい。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	ご利用者の希望がある時には電話を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	お花を飾ったり、壁面飾り、写真を掲示するなど季節感を味わって頂けるように工夫している。温度や冷暖房器具の使用など、ご利用者の希望に沿って対応するように努めている。玄関の開閉には猫の鳴き声センサーを使用して、自然な雰囲気の中で安全に配慮できるよう工夫している。	玄関やリビングなど随所に大小のお雛様や季節の花を飾り、春の季節を報せている。リビングでは雑誌のページをめくる人、塗り絵をしている人、洗濯物をたたむ人など、利用者はそれぞれ好きな場所で、好きなように過ごしていた。職員は笑顔で優しい言葉使いで対応し、利用者の安心した表情が見られた。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	全体的には食事の時の席が習慣化してきてはいるが、特に固定はしておらず、その時と気分に応じて、ソファで過ごしたり、いつもとは違う席で過ごしたり、ご利用者同士の関係性や気分で、思い思いに過ごしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	ご家族に馴染みの物を持ってきて頂くように声をかけている。季節ごとのカードやご家族からのメッセージなどを掲示して、本人らしい空間になるように努力している。	ヨガや卓球を趣味としていた人、手芸が得意だった人など、居室に置いてあるものから、元気だったころのことが想像された。飾られている写真やメッセージカードから家族の愛情が感じられ、その人らしい落ち着ける部屋となっていた。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	台所はご利用者が使用できるよう広く作られており、多人数で調理を行うことができる。必要に応じて目線の高さに部屋の名前や、トイレに「トイレ」と掲示するなどして、認知症によって困っている状況が軽減できるよう工夫している。		